

道徳の授業では、ねらいとする価値にせまるため、児童相互による話し合い活動を取り入れてることも多いと思います。しかし、限られた時間の中で十分に考えを練り合うことは難しく、一部の児童による意見交流で終わってしまったり、考えを深める時間が足りなかったりすることもあるのではないのでしょうか。これらの問題を解決する手段の一つとして、個人用ホワイトボードを活用した意見交流の方法について紹介します。

ホワイトボードについて

次のものを人数分用意します。

- ・A4サイズの白いマグネットシート（表面がツルツルしたもの）を横半分に切ったもの。
- ・ホワイトボードマーカーと小型のメラミンスポンジ（文字を消すために使用）。
- ・赤と青の丸型マグネット（直径1 cmくらい）

※マグネットシートは児童机の裏側（引き出しの底面）などに貼り付けて保管。

活用方法

様々な使い方がありますが、私は価値追求の発問の際に使用しています。

- ① 発問に対する自分の考えを、できるだけ端的な言葉で書く。
- ② 考えを書いたボードを黒板（移動用ホワイトボード等）に掲示する。
- ③ ボードに書かれたそれぞれの意見を全員で眺め、共感する意見に青いマグネットを、質問したい意見に赤いマグネットを貼る。
- ④ マグネットが多かった意見から、話し合いを展開する。
- ⑤ 学習後、全員分のホワイトボードの画像を道徳ノートの裏側に印刷し、ファイルに綴じる。

ホワイトボードのメリット

- ・児童一人一人が自分の考えを持ち、話し合いの場に参加することができる。
- ・全員の意見が一目で把握できるため、交流の時間の短縮につながる。このことにより、価値についてのより深い話し合いに時間をかけることができる。
- ・共感・質問のマグネットを貼ることを通して、児童が他者の意見について主体的に考え、判断することができる。また教師側も、学級全体の意見の偏りや、児童の興味・関心を把握しやすいため、話し合いをスムーズに展開することができる。
- ・ホワイトボードの画像を道徳ノートの裏面に印刷することで、個々の児童が授業の様子をいつでも振り返ることができる。

ホワイトボードを活用するようになり、主体的に話し合い活動に参加する児童が多くなってきているという実感があります。はじめのうちは仲の良い友達や発言力のある児童のボードに共感を示す青いマグネットが集まっていましたが、回を重ねるにつれ、価値にせまる意見が書かれたボードに、青や赤のマグネットが集まるようになりました。それは、「この意見についてもっと深く考えたい。」という児童の気持ちの表れだと思います。

私は価値追求の発問の際にホワイトボードを使用していましたが、一目で意見交流ができるという利点を考えると、導入部や中心発問で活用することもできるのではないかと考えています。



教科書の教材文を使って授業を展開することが通常ですが、時に担任の教師以外のゲストティーチャーに話を聞かせてもらうことで、より道徳的価値に迫ることができることも事実です。

家族愛をテーマとして考える教材の時に、子ども達の身近な存在である保護者の方にゲストティーチャーとして来ていただくことで、より深く考えられるのではないかとこの仮説から2つの学年で実践をしました。

「おばあちゃんの心」(第6学年)

(教師の思い) 家族の愛情を当たり前のよう受け止めるだけで、不満や批判が先行してしまうこともある。また、手伝いはするが、それぞれの立場を理解しようという意識には及んでいない。そこでこの教材を通して普段家族のために働いているのは、家族の愛情であることに気付かせる手段としてゲストティーチャーに来ていただいた。

(ゲスト) クラスの保護者(母親)

(内容) ・子どもの頃の家族への思いと親になってからの思いの変容

・親を看取るまでの家族の関わり

(良かったこと)

- ・ゲストティーチャーの言葉を真剣にうなずきながら聞いていた姿が印象的だった。
- ・振り返りでは、「これから家族のことをもっと大切にしたい。」との思いを持った児童が多くいた。



「お母さんのせいきゅうしょ」(第3学年)

(教師の思い) 家族のために何か出来る事はないか、という意欲を高めさせたいという思いから、ゲストティーチャーに来ていただいた。

(ゲスト) クラスの保護者(母親)

(内容) ・子どもを持った喜び

・子どもへの愛情と期待・健康への願い等

(良かったこと)

- ・家族とは当たり前の存在であり、〇〇をしてくれる人。すぐ怒る、こわい。との思いを持っていた児童が、話を聞いた後では「怒るのは自分のことを考えてくれているから。お母さんはみんなのことが大好きなのだ。いつも家族のことを考えていてくれる。」と明らかに話の前後で児童の考え方に深まりが見られた。



配慮すべきこと

保護者をお願いする場合は良い関係を4月当初から築いておく必要があり、これはより良い学級経営にも有効だと思います。また家族を扱う教材は、児童の家庭の状況を把握してデリケートな部分をどう扱うかを十分に検討することも必要です。

授業の内容にもよりますがゲストティーチャーの活用は大変有効だと思います。同じ内容を担任が語ったとしても、児童には強く響かないことが、実際の体験・経験を目の前で話して頂くことで熱い思いが伝わりやすいと考えられます。

他にも、郷土愛をテーマにした自作教材では登場人物である地域の方に来ていただいて、実際のお話を聞かせていただいたりもしています。

本校では、1年生から道徳ファイルを使います。これには毎時間ごとの考えや思いを記入した道徳ノート綴じ、卒業するまで記録を積み重ねていきます。このなかには教師からのコメントはもちろんですが、学期ごとには家族からのコメントも記されており、卒業の頃にはとても内容の濃い1冊が出来上がります。

道徳ノートについて

道徳ノートとは、毎時間ごとに子どもたちが自分の考えを書き留めるためのワークシートです。基本的には、中心発問、価値追求の発問、授業に対する振り返りや自己評価について記します。またそれは、各学年の発達段階や目の前の子どもの様子に応じて各担任が作成し、使っています。教師側の意図がびたりとはまり、考えが深まる時もあれば、思ったように考えが深まらない時もあります。そのため、試行錯誤を繰り返しながら、毎回作成しています。

道徳ファイルについて

道徳ノートを道徳ファイルに綴じるよさは3つあります。

1つ目は、子ども達がいつでも自分の考えやその時の思いを振り返ることができる点です。道徳ノートのまま1枚ずつ返すこともできますが、そうすると道徳の時間にはよく考えられていてもその時間が終わればそれでおしまいということになりかねません。それではあまりにももったいないと考えます。道徳ノートが綴じてあることで、ふとした時にその時間に考え

ていたことを振り返ることができます。また学年が上がってから読み返すことで、新たな気づきがあったり、考えが深まったりすることがあるかもしれません。そうすることで道徳的価値が知らず知らずのうちに強化され、次時の道徳の時間や普段の生活に生かしてほしいと考えます。

2つ目は、道徳の時間の成果を視覚的に量でとらえられる点です。道徳は板書を残すこともテストもなく、子どもたちにとって成果の分かりにくい教科です。でも、道徳ノートがファイルにどんどん増えていけば、一目で自分の頑張りが分かります。道徳ノートがたくさんあればあるほど、一生懸命考え、書き残した証だからです。「これまでこんなに頑張ってきたのだから、次も頑張って考えよう」という意欲にもつながります。

最後に3つ目は、教師側が子ども一人一人の成長を確認することができる点です。道徳は、6年間を通して、様々な道徳的価値についての理解をもとに道徳性を育てていく教科です。同じ価値について授業した時に、前の学年の時より考えを深めることができていたか、といった子どもの成長を確認するとともに、教師自身の授業改善に生かしていくこともできます。



道徳ファイルと評価について

道徳科の評価については、学習指導要領には「学習状況」と「道徳性に係る成長の様子」が示されていますが、児童にとっては道徳的成長を実感し、学習意欲の向上につなげていくためのものであると同時に、教師にとっては指導計画や授業改善に役立てていくためのものでなければなりません。

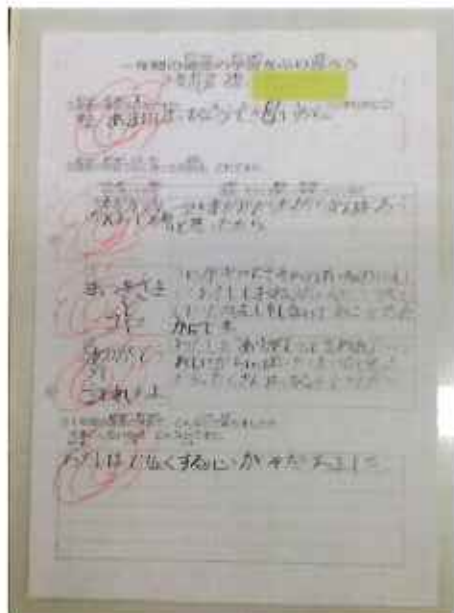
そこで本校では年1回、学年末に児童の道徳的な成長を認め、励まし、伸ばすためのものであることを念頭に置き記述式で評価を行います。

通知表には、保護者に対して道徳科での学習の様子がよりわかりやすいものになるよう子どもたちの年間を通じての評価と単元ごとの評価を合わせて記述します。

例えば、Aさんについては『お話の主人公に共感して、自分の経験と重ね合わせながら考えることができました。また、友達の意見をうなずきながら聞き、さらに自分の考えを深めようとする様子が見られました。「本がかりさんががんばっているね」では、主人公と自分を重ね合わせて、自分も本係としてクラスのために頑張っていこうという思いを持ちました。』という評価をしました。

この評価の根拠の一つとして、道徳ファイルを活用しています。

学年末に子ども達自身にも1年間の道徳の学習を振り返る時間を設定しています。その振り返りにどんなことを書いているかを確認し、本人の思いと担任の評価にずれが生じないよう努めています。そして、評価することにより子どもの自己肯定感が増し、次の学年へのよい足がかりになればと思っています。



Aさんの1年間の振り返り

自分の考えや思いを書くことは、簡単なようでなかなか難しいものです。4月当初、私のクラスには「何を書けばよいかわからない」「何も思いつかない」と言って、全く鉛筆が動かない女の子がいました。「お友達の意見の中にRさんと同じような考えがあったら真似して書いてもいいよ。」と言うのですが、いつも困ったように笑うだけでした。でもいつ頃からでしょう。猛然と書き進めるようになっていたのです。書かれている文は口語体の拙いものですが、誰の真似でもないその思いは道徳ノートいっぱいに溢れていました。2学期末にファイル整理をしたとき、彼女は綴じた道徳ノートを1枚1枚確認するように見ていました。「たくさん書けるようになったね。」と言うと、満足そうな顔で大きくうなずいていました。

道徳ノートについては本当に価値に迫る発問になっているのか、もっとよい発問はなかったのかと迷うことばかりです。今後も日々の実践の中でよりよい道徳ノートを目指して、研修を積んでいきたいと思っています。そして、より内容の濃い道徳ファイルを卒業する子ども達に持たせてあげたいと思っています。

自作教材のメリット

○自作教材は、児童の実態や指導上の課題に合った教材を作成することができます。

○教材を作る過程で授業者の思いが強くなり、ねらいとする価値に迫りやすい教材になります。

自作教材を作る上でのポイント

○「学びたい！」を引き出すために資料を選ぶ

児童が主体的に学べる魅力的な資料を探します。

- ・地域の活動や行事、歴史など地域性を活かしたもの
- ・本や絵本、教科の教材からより深めるもの
- ・教師自身が体験したことを伝えるもの

実際に取材に行き、体験者に話を聞くことが大切です。取材する、体験することにより、授業者はより物事を具体的にわかりやすく表現できるようになります。

○「教材で深めたい内容項目」を決める

どの内容項目に沿って進めていくのかを決定します。どの価値を深めたいかによって、文の構成や表現が変わってきます。



教材文を作る上でのポイント

道徳の教材文は国語の教材文ではないので、内容項目に合わせた文の構成になるように心がけます。道徳の教材で大切なのは中心発問を決めることです。大まかな内容を構成した上で、まず価値に迫りたい部分を決めることから始めます。

道徳の教科書の教材では中心発問をどこにするかを悩みますが、自作教材の場合には価値の発問に沿った文を自由に考えられるという大きな利点があるので、そこをまず決めることが一番大切だと考えます。作っていく上では集めた資料の内容を詳しく知ってもらう必要があります。しかし、伝える情報が多すぎると内容理解に時間がかかってしまいます。中心発問で深めていく内容以外のものはなるべく文に入れないことも注意します。



自作教材例

わたしの桜（5年生）

（取材で得た事実）堤防沿いで桜が咲く季節になると桜の木に集まり、恩師を囲み同窓会をしているおじいさんたちがいる。南山城水害で大変な被災状況からの復興を願い桜の木が植えられた。

（教材の概要）堤防沿いでゴミが落ちているのに興味がないわたしがおばあさんの桜の木への思いを知り、地域を大切にしていこう、思いを受け継いでいこうとする心をもった。

（中心場面）おばあさんの話を聞いて、心が痛くなった。よく見るとおばあちゃんのスーパーの袋にはたくさんのゴミが入っていた。わたしはそばに落ちていた葉をそっと拾った。そして次の日、昨日あった出来事をみんなに話した。

（中心発問）「どうして昨日のことを終わりの会で話したのだろう。」

わたしの桜

ある朝の児童集会で地域をきれいにしようという呼びかけがあった。この呼びかけは毎年あるもので、この呼びかけの後に地域ごとに分かれて落ちているゴミをひろいに行くことになっている。わたしは「ゴミがそこまで落ちていないわけじゃないし、きれいだから行かなくてもいいのに・・・」と思いがら話を聞いていた。

わたしたちの地域のそうじは不動川沿いに決まり、ゴミひろいに出かけた。不動川沿いの桜はとて有名で、桜がさく季節になると、わざわざ遠くから見に来る人もいるくらいである。

不動川に若くと、わたしたちと同じようにゴミひろいに来ている地域の人

がいた。

「あつ、おばあちゃん。」と友だちの

さやちゃんが自分のおばあちゃんに気付いた。

「こんにちは。」とわたしは声をかけた。

「こんにちは。いつもゴミをひろってく

れて、ありがとうね。」とおばあちゃんが言った。

「あつ、はい。」

わたしはとっさに返事をしようとしたが、心からの返事はできなかった。

「おばあちゃんは、なんでゴミをひろっているの。」とさやちゃんが聞いた。

するとおばあちゃんは



「この地域には、川がたくさんあるでしょ。だから、昔から水害になやまされてい

てね。特に昭和二十八年の水害では、畑倉でも家が流され、多くの人がなくなっ

てしまったの。そのような出来事もあって、村の復興と発展、子どもたちの明るい未

来を願って、桜が植樹されたのよ。」

その話を聞いて、わたしは言葉が出なかった。

「この桜の木は、わたしが学校を卒業する年に、お父さんやお母さんたちが記念に

桜の木を植えようということを提案して、六年生と先生たちの分、およそ百本の桜

を不動川沿いに植えたのよ。」

おばあちゃんは桜の幹をなでながら、話を続けた。

「その時の私は、さつきのような思いがあることをあまり知らなかったの。ただ桜

の木の枝に自分の名前を書いた札をぶら下げていたから、中学生になっても自分の

植えた桜の木はわたしの桜と思って、かれないように暑い日も水やりに行ったこ

とを覚えてるわ。今でも毎年、つぼみができているな。もうすぐさくかな。

きれいにさいたなあ。どうれしい気持ちで見えていて、自分の分身のように

感じているのよ。」

この話を聞いて、わたしは心が痛くなった。よく見るとおばあちゃんが

持っていたスーバーのふくろには、たくさんゴミが入っていた。

わたしはそばに落ちていたゴミをそっとひろった。

そして、次の日、学校の終わりの会で思い切っ

て手を挙げて、昨日あった出来事を話した。みんな

目はとてもかがやいていた。

伝記・偉人伝とは

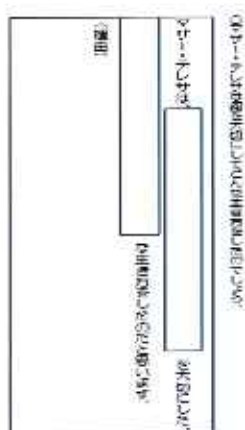
「伝記・偉人伝」を扱う教材は、理想的な生き方が書かれているために主人公の心の葛藤がほとんどなく、Before-after がわかりにくいことがあります。そのため、児童が主人公に対して漠然と「すごいな。」という感想しか持てないような、深まりのない授業になりがちでした。そこで、どうにかして児童が自分に引き寄せて考えることはできないだろうか、授業改善を試みました。

2ステップの発問で自分に引き寄せる

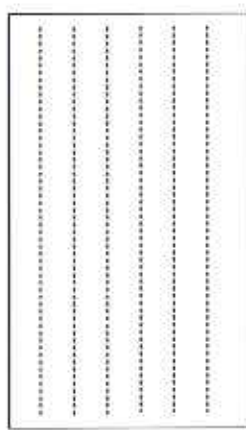
- ①主人公は何を大切に、どのような生き方をしたのかを考える。
- ②主人公の生き方から自分は何を学んだか、自分の生き方にどう生かしたいかを考える。

伝記・偉人伝の授業では、発問をパターン化して授業を行いました。まず一つ目の発問では、主人公が大切にしたこと（道徳的価値）は何かという視点を与えることで、その人物の「何が、どうすごいのか」が考えやすくなりました。そして2つ目の発問で、主人公の偉業から自分はどんな価値を見出したのか、それをどう生かしていきたいかを考えることで、学びを自分の生活に引き寄せることができるようになりました。主人公の視点で読むのではなく、その人物から影響を受けた人物、つまり自分自身の視点で考えさせるということです。

当初、伝記・偉人伝の授業のために考えたこの方法は、他の教材でも有効であることに気がきました。物語の教材であっても、主人公が大切にしていることに気づき、そのよさを自分の生き方にどう生かすか考えることは、児童が道徳科での学びを自分の生活に引き寄せることにつながります。このことは、道徳的実践力の育成にも大きな影響を与えてくれることと期待しています。



↑道徳ノートの例



物語教材への応用→



↑板書の例



年間を通して「生き方」を考える

これまで上記の方法で「生き方」について考えさせる授業を行ってきた中で、道徳科はまさに自分の「生き方」を考える授業であると考えられるようになりました。そこで今年度、年間を通して児童に「生き方」を考えさせることを試みました。第1回の授業で、ある人物の生き方について考えた後、これからの自分はどのような生き方をしていきたいかを道徳ノートに書き残しました。その後およそ1年間、道徳科の授業を通して、様々な「生き方」に触れてきた児童達に、その集大成として、1年間の自分の生き方を振り返る授業を行う予定です。

日頃から自分の「生き方」を考えながら生活するということは、大人であっても大変難しいと思います。しかし、人物の業績やその行為を支えた考え方や心情について考えを深めさせたり、懸命に生きた姿の尊さに目を向けさせたりすることを通して児童に自分を見つめ、よりよく生きようという意欲を持ってほしいと願っています。

特別支援学級の道徳は、在籍児童の実態にもよりますが通常学級での道徳のように読み物教材で1時間の授業の構成を組むことが難しいのが実状です。そこで特別支援学級において実施する特別の教育課程については、「実態に応じた教育課程を編成すること」(学習指導要領 総則第4の2(1)のイ)とあるので、児童の発達段階や現状に応じて児童が身につけておくことが必要と考えられる学習内容に基づき、ひまわり学級での道徳の授業を行っています。

具体的には対人関係に課題を抱える児童に有効とされるソーシャルスキルトレーニング(以下 SST)をひまわり学級の道徳の授業として実施しています。

内容

- ① 『『ありがとう』を言おう』(写真1)
- ② 『『おはよう』を言おう』(写真2)
- ③ 『『仲間に入れて』を言おう』

※内容は、児童の現状に即していることと、今後の対人関係を結ぶ上で役立つと考えられることに重点を置いて選定しています。

実施方法

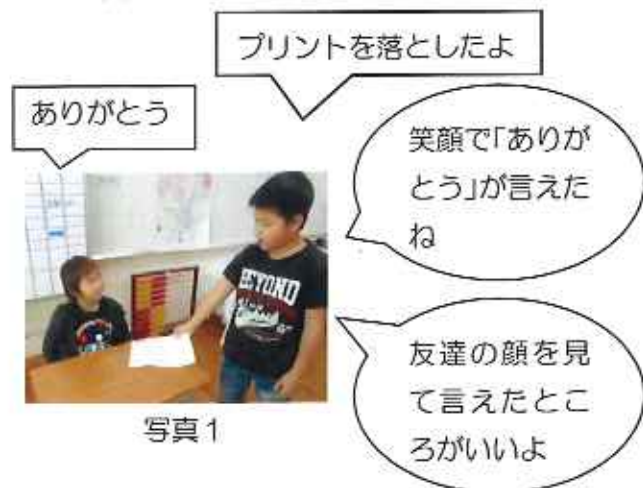
- ① 最初に教師が悪い見本を見せる。
- ② 児童によくないところを指摘させる。
- ③ 児童にロールプレイをさせる。
- ④ 教師は児童のロールプレイでのよいところをそのときに褒める。

成果と課題

SST で学習してから朝のあいさつの回数が増え、お辞儀をして言えるようになりました。このように日常生活において SST で学習したことができているときは、褒めてさらに定着を図っています。

また、これからも児童の日常生活をよく見て、SST として取り上げる内容を見定め、定期的 to 実施していくことが必要と考えられます。

ひまわり学級の児童は一人ひとり課題や特性が違います。例えば、AD/HD の児童は、やるべきことは分かっている、注意が散漫になってできないといったことがあります。この学習は有効ですが、児童の実態や障害の特性に合わせて、環境調整をする等の工夫改善を加えながら実施していきたいと考えています。



ファミリー班（縦割り班）を活用しながら、全校で一つのテーマについて考え、話し合える場として「ファミリートーク」を設けています。この時間は道徳の時間で考えたことと、実践との橋渡しの役割と捉えています。「よりよい学校を作っていこう。」という強い思いを、異学年の児童同士で共有することができます。また、相手に伝わりやすいよう工夫して意見を述べる力、相手の意見をじっくり聞こうという力を育て、児童の視野を広げる大切な時間になっています。

テーマ設定について

テーマについては、1年生～6年生までが共通して考えることができる学校行事や全校での取り組みについて等、児童にとって身近なものを設定するようにしています。

今年度は初めて校内に「目安箱」を設置し、児童たちから話し合いたいテーマを募り、それについての話し合いをしました。「学校からいじめをなくすためには・・・」という深刻なテーマでしたが、仲間たちから出たテーマということで、自分事として捉えやすかったのか、積極的に思いを伝え合うことができました。

テーマ例

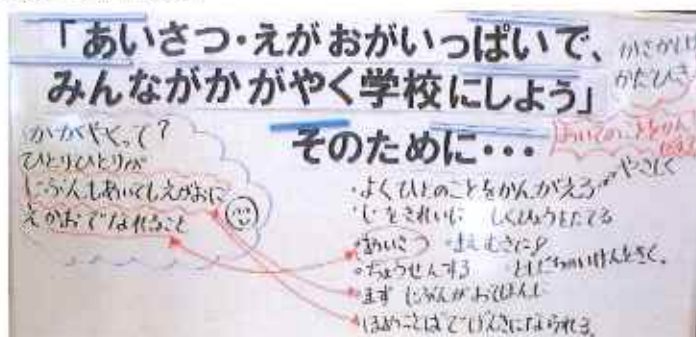
- ・もくもく掃除をよりよい清掃活動にするために
- ・音楽発表会を成功させるために
- ・体育大会でがんばりたいこと
- ・一人一人が輝く大縄大会にするために

子どもと共に考える

話し合いは、6年生が進行役となり、6～7名のファミリー班でグループトークを行った後に全体交流をするという流れで行います。班のメンバー構成によって話し合いの盛り上がりには差が出てしまうことが課題ですが、グループ担当の教師が話し合いのサポート役に入るように心がけています。また、子ども達だけでなく教師も（時には保護者も）共に考え、大人の意見として全体で発言するようにしています。

ファミリートークコーナー

ファミリートーク後には、教室に戻り、振り返り用紙に、ファミリートークではうまく伝えられなかったことや、友達の話を聞いた後に持った新たな思いを書きます。それらを掲示するコーナーを作り、意識の連続化を図る工夫をしています。



音楽には、計り知れない力があります。教員として働く中で、その力に何度感謝したかわかりません。
 —さっきまで教室の隅でふてくされていた子が、前奏が聞こえると体を揺らしながらみんなと一緒に歌い始める。—
 —教室では「はい。」と返事をするだけで顔を真っ赤にしている子が、音楽発表会で生き生きと歌っている。—
 —年齢も性格もばらばらの児童と教師の歌声が、体育館でひとつの大きな塊となり温かく響き渡る。—
 そんな光景にいつも胸が熱くなり、音楽の偉大さを感じています。

本校の実践

本校では、数年前から「いい顔・いい声・いい心」をスローガンに、全校合唱に取り組んできました。学期ごとの歌を決め、行事やファミリートークの際に教員も含め全校で歌っています。中でも東日本大震災復興支援ソングでもある「ふるさと」は、毎年音楽発表会で歌うことで、本校のテーマソングのように定着してきました。低学年にとっては難しい曲なのですが、高学年の美しい歌声に憧れ、一生懸命練習を重ねることで歌えるようになります。そして高学年も、低学年の尊敬の眼差しに頬を赤らめながら、その期待に応えようと堂々と手本を示してくれます。保護者の方や地域の方からもお褒めの言葉をいただけるようになり、中には涙を流しながら聴いてくださる方もおられました。数年間の取り組みを通して、「棚倉小学校は歌が上手。」「歌が好き。」と感じる児童が増え、全体として自己肯定感の高まりを感じるようになりました。自分に自信が持てない児童が多かった本校にとって、これは大きな成果であると考えています。

そして、道徳科の授業における音楽の活用にも取り組み始めました。導入での雰囲気作りとして音楽を流したり、終末でまとめとして歌を歌ったりと、音楽の可能性を広げていきたいと考えています。また、児童が道徳ノートに考えを書く時間にBGMをかけることも試みました。集中して書きたい児童の思考の妨げになるという懸念もありますが、雰囲気作りに加え、歌詞を想起することで自身の考えを言語化する手助けになるのではないかと、その効果に期待しています。

先日、昨年本校を卒業した兄を持つ女子児童が、「先生、お兄ちゃんもな、家でよくふるさと歌ってんで。あの曲も、この曲も…」と、にこにこ話してくれました。かつて私自身も担任をしていた彼とは、音楽の授業を通してたくさんの歌を歌ってきました。その時の歌を覚えていてくれたのだと思うと、嬉しさが溢れました。歌は様々な感情や思い出と共に、心に残り続けます。大切な仲間と共に歌った曲ならなおさらではないでしょうか。

“棚倉小学校で歌った歌を、子ども達が将来ふとした瞬間に思い出し、懐かしさに浸ってくれますように。”

“落ち込んだときには、歌が彼らを支えてくれますように。”

“たとえぶつかり合うことがあっても、人と人との心を歌がつないでくれますように。”

そう願いながら、これからも子ども達と共に歌を歌っていきたいと思います。



道徳教育の研究をはじめたころ「授業では素晴らしい意見を発表することができるのに、行動が伴わない。」「子ども達の道徳的心情は育ってきたが、実践意欲や態度が十分育っていない。」という私たち教師の葛藤がありました。そこで「意識の連続化」を大切にすること、そのための環境を整えることに取り組むことにしました。

道徳コーナーは、各学年の道徳学習の足跡を残すためのものです。授業で考えた道徳的価値に児童が日々触れることができる場を大切にしようという思いで作りました。



学び合いの場としての道徳コーナー

授業の流れ、児童の考えが分かるように、授業で使用した短冊や児童の道徳ノートを掲示しています。児童がよく通る階段の踊り場の壁面を各学年1コーナーになるように割り振られています。正直、初めは担任として「掲示するのが大変だな。」という思いもありましたが、コーナーの前で足を止めて友達の道徳ノートを読んでいる児童、「この勉強私たちもやったな。」と、下級生のコーナーを見て前のことを思い出している児童、「〇年生になったらこんなんするんや。」と関心を持って上級生のコーナーを見ている児童の様子を目の当たりにすると、道徳コーナーの必要性を感じることができました。



また、児童だけでなく、教師側も、「隣のクラスではどんな意見が出たのかな。」「この教材でどんな考えに気づかせているのかな。」「前担任していた〇〇さんはどんな考えを書いているのかな。」等、道徳コーナーから学ぶことはとても多いです。



意識の連続化

児童の意識の連続化を目的として作った道徳コーナーでしたが、実際には児童だけでなく教師自身の意識の連続化につながっていました。教師の意識が連続化されると、当然児童に対する言葉かけも変わってきます。道徳コーナーが「最近子ども達が育ってきたな。」という私たちの実感につながってきた要因のひとつにもなっていることは間違いありません。道徳科で学んだことを実践につなげようとする意識を育てたり、自分の考えを深めたり広げたりするのに大変有効だと感じています。

「児童が自分たちの学校を自分たちで良くしていこうという思いを持って、自ら行動できる機会があればいいな。」という思いで話し合い、生まれたのが「チャイルドボランティア」でした。

当初は、「明日参観日だから、花壇の花を各教室に持っていってくれるかな。」「廊下のひどい汚れがいつもの掃除できれいにならないから、休み時間を使って雑巾でピカピカにしようか。」など、教師が思いついた時に思いついたことを、関心を持っていそうな児童に伝え、時間を決めて一緒にやるというスタイルでした。少しでも参加児童の意欲を高めるために、T・C・V（たなくら・チャイルド・ボランティア）のバッジをつけて活動をしたり、チャイルドボランティア用のホワイトボードを掲示し活動と呼びかけたり、学校便りに掲載したりすることで活動を「見える化」しました。

チャイルドボランティアの日



高学年は委員会活動で学校のために活動をする機会がありますが、低・中学年はそのような活動をする機会がありません。そこで、今年度からは対象を3, 4年生に絞って(5, 6年生の希望者も含む)毎月15日を「チャイルドボランティアの日」と決め、児童が必ず通る昇降口近くに「チャイルドボランティアの案内」を出すようにしました。毎月15日と決めることで、全職員から「チャイルドボランティアの日にしてもらいたいこと」を募集することができると考えたからです。

また、撮影した活動風景を「ありがとう」のメッセージとともに掲示するようにしました。写真の前で足を止めて頑張っている自分や友達が写っているかを確かめる姿が見られます。

自分たちの学校を自分たちで

ボランティアである以上、強制はできませんが、学級での係活動と違い、「みんなのため」「違うクラスの友達と一緒に活動できる」ということで予想以上に活躍をしてくれています。

「チャイルドボランティア」は道徳科で得た道徳的心情、判断力、実践意欲と態度を実際に生活に生かせる場です。「自分たちの学校を自分たちで作っていく」「みんなのために」という気持ちを持てる児童、「ありがとう」の言葉でより一層頑張れる素直な児童をこれからもっともっと増やしていきたいと思っています。



道徳は学校教育だけでなく、家庭との連携も大切であるという思いから、学校便り・学校ホームページ・学年便り・学級通信などを活用し、保護者へ発信しています。道徳を中心として、学校の取組を知ってもらうことで、家庭や地域を巻き込み、全家庭や地域で全児童を育てていこうという雰囲気を作っています。

掲載例① 学校便り



掲載例② 学校ホームページ



グッド・ハート 道徳

2学期の終わりに、ご家庭でお子さんと道徳の学習について話し合ってください、ありがとうございます。
「親子で道徳」のお家の方の感想を紹介させていただきます。

この勉強をしたことで、自分が決めたことは、最後までやりとげることが大事だと学んだようです。その気持ちを大切にして欲しいと伝えました。【1年生保護者】

自分と相手の気持ちを考えるお話をたくさん勉強して、自分だけでなく他の人の立場で考えることができたようです。学校での生活や遊びの中で、たくさん学んで成長できればいいなと思います。【3年生保護者】

一つ一つのお話から、自分の生活に生かせることを見つけていると思いました。しっかり意見が書いてあるので感心しています。道徳の時間に学んだことを実際に行動に移すことは意識していないと難しいですね。頭でわかっていても、正しく行動できるのか。人の気持ちを考えられるのか。大人でも難しいことです。周りの人と仲良く楽しくやっていけるように、これからも色々考えていこうね。【4年生保護者】

本当の親切とは、困っている人を助けることだと信じて行動にうつしてほしいです。自分のしたことは、良いことも悪いことも必ず自分に返ってきます。見返りを考えずに、困った人がいたら自分のできる限り行動にうつしてほしいと思いました。【5年生保護者】

家族で決めた携帯電話のルールが、今、ほとんど守れていません。改めて考える機会となりました。「これからも、色々な人と関わっていくことになるけれど、思いやりと感謝の気持ちだけは忘れず過ごしていこうね。」という話をしました。【6年生保護者】

大切なことに気付いてくれて嬉しいです。自分も周りの人の命も大切ですね。2学期に入って、急に道徳ファイルの「自分の考え」や「ふり返り」がしっかり書けるようになっていて驚きました。成長しているのだなあとしみじみ感じました。【3年生保護者】

保護者の皆様からのメッセージが子どもたちの励みとなりました。また、家族に自分が授業で考えたことを話すことにより、子どもたちは、さらに自分の考えを深めたようです。ご協力ありがとうございました。

研究推進に関わって～研究主任から見た棚倉の道徳教育～

5年前、本校の道徳教育の研究がスタートしました。本校には道徳教育のエキスパートがおらず、「どうやって研究をしていったらよいのだろう。」という不安でいっぱい、ゼロの状態からの始まりでした。

みんなが同じゼロからのスタートということが功を奏し、みんなで試行錯誤しながら、「あでもない、こうでもない」と積み重ねてきたものが、現在の棚倉小学校の道徳教育です。それぞれが、自分のできることにチャレンジしてみること、よりよい方法がないかと模索すること、そして、他の先生の実践をみんなで共有すること。その繰り返して、今に至っていると感じます。

研究授業

どの担任も年に一回は、研究授業（ブロック研や研究大会を含む）を行っています。

学年だけでなく、ブロック学年で指導案を検討したり、事前授業を見たりと、研究授業に向けて、前向きに取り組んでいます。事前授業をして、検討を加え、さらに授業をすることで、する方も見る方も、指導案や指導に改良が加えられ、自分の授業へと生かすことができます。年間にこの繰り返しを何度も行うことで、授業力が高まっていると感じます。

また毎回、「今回は、こんなことに挑戦してみました。」と新しい取組が紹介されます。新たな取組に触れ、「次は、自分のクラスでやってみよう。」と思えることが多々あります。お互いのよい刺激の場となっています。

事前・事後研究会

研究授業にあたっては、事前研究会、事後研究会を行っています。

毎回、小グループに分かれて検討し、それを全体で交流するという方法です。時には厳しい意見が出ることもありますが、この交流で、さらに新しい考えが飛び出したり、お互いの実践を知ることができたりします。

本校の研究は全員で作り、進めていると感じる、とても大切な場です。



授業評価シート	
授業の目標・ねらい	授業の目標・ねらいが明確で、学習の意欲を高める効果的であった。
授業の展開・内容	授業の展開・内容が明確で、学習の意欲を高める効果的であった。
授業の進め方・方法	授業の進め方・方法が明確で、学習の意欲を高める効果的であった。
授業のまとめ・振り返り	授業のまとめ・振り返りが明確で、学習の意欲を高める効果的であった。
授業の特色・工夫	授業の特色・工夫が明確で、学習の意欲を高める効果的であった。
授業の改善点	授業の改善点が明確で、学習の意欲を高める効果的であった。
授業の評価	授業の評価が明確で、学習の意欲を高める効果的であった。

毎週の授業

授業の準備は、学年で相談しながら行っています。

めあてをどうするか、発問をどうするか、どんな流れでやるのか。一人で考えるより、様々なやり方や方向性が生まれています。

職員室の中では、「明日の道徳のめあて、どう提示するか難しいな。」「この発問では、ねらいに迫れないのでは。」「ここで、こんな風に揺さぶりましょう。」など、いろいろな話が飛び交います。

また、「今日の道徳、面白かったです。」「今日の道徳、こんな方向にいつてしまって、失敗しました。」「ちょっと今日の道徳の板書、見てもらえますか。」「こんなことしてみたいんですが、どう思いますか。」など、こんな声が、毎日のように聞かれます。そんな話がどこかで聞こえると、そこに他の学年の先生も寄ってきて、さらに話が盛り上がります。

毎週の道徳の授業準備には少しばかりの気合がいますが、毎週の授業を大切にする姿勢、そして、よりよいものを求める姿勢は、担任として忘れずに持っていたいものです。

道徳の授業以外でも

研究の成果か、もしくはそういう先生が集まったから研究が進んでいるのかはわかりませんが、道徳に関わらず、年齢に関係なく、新しいことに挑戦しようとする空気があります。若い先生も年配の先生も、お互いから学んで素直に受け入れられる雰囲気職員室にあります。そこから、道徳だけでなく、すべての授業においての授業力の高まりを感じます。

道徳に関しても、他の授業や校務面に関しても、いろいろな手法をもつ職員集団ですが、ベクトルは確実に同じ方向に向いています。職員集団のベクトルが一致していることが、棚倉小学校の校風を作っています。職員集団のまとまりが、子どもたちのまとまりにつながっていると感じます。

つまり、道徳教育の研究を通して、職員同士のつながり、子ども同士のつながり、そして職員と子どもとのつながりができたのではないかと思います。道徳の授業以外に、多くの研究の成果が得られました。

ふり返ってみると、研究主任として、「これをしてほしい」「あれをしなさい」などと言ったことは、ほとんどありません。本校の場合、それぞれの先生が一人の研究者として、よりよい道徳の授業をするにはどうしたらいいか、子どもたちを育てる道徳教育はどうしていくべきか、ということを考えて発信しています。それを実践してみて、うまくいけば、さらに実践を重ねていくというサイクルが職員室の中にできあがっています。

今までの研究の中で定着していることは、教職員の中から生まれてきたアイディアです。逆に、よいと思ってやってみたけれど、1年で止めたことも多々あります。全員が無理なく、ずっと続けていけることを目指してきました。

本校の道徳のスタイルは多様です。ただ、中心に子どもたちの成長を据え、子どもたちが「よりよく生きよう」と思えるきっかけを与えることができる道徳教育をしていこうと、5年間研究を進めてきました。その場にとどまらず、今日より明日と、さらに良いものを作り続けていけるような棚倉小学校の道徳教育でこれからもありたいと思っています。